魔法科高校の劣等生～最速の戦士～

悪魔の実

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

日本をグローバルフリーズから救った戦士海道零時は国立魔法大学付属第一高校に入学し仲間たちと平和な学園生活を送るのだった。

目次

入学編
一話　何故海道零時は魔法科高校に入学するのか ―――― 1
二話　何故A組はE組を見下すのか ―――― 6
三話　何故A組とE組は言い争いをするのか ―――― 17
四話　何故重加速は突然起きたのか ―――― 24
五話　何故海道零時は変身するのか ―――― 30
六話　何故海道零時は自分の事を司波達也達に説明するのか ――――

入学編

一話　何故海道零時は魔法科高校に入学するのか

　世界では２０４５年～２０６５年から２０年もの戦争が続いていた。この戦争の名は第三次世界大戦と言われている。だがこの戦争は熱核戦争にはならなかった。その理由は魔法技能士のおかげだった。

　そして２１世紀末不安定な情勢下で各国は魔法師の育成に励んだ。そんな中２０９３年日本ではある事件が起きていた。事件とは２０９３年７月８日火曜日午後９時３０分に起きた謎の怪人軍団後にロイミュードと呼ばれる怪人体が重加速と言う体がゆっくりとしか動かない怪奇現象を起こし破壊活動を行ったのだ。

　ロイミュードが起こす重加速により魔法師たちの魔法は通じず日本は滅亡の危機に陥った。その時１人の戦士が日本を守るため立ち上がった。戦士は重加速をもろともせず好き放題人間を襲っているロイミュード達を倒し続けたのだった。そしてグローバルフリーズは１人の戦士お陰で３日で収まったのだった。

グローバルフリーズが起きてから2年後の２０９５年４月国立魔法大学付属第一高校の校門中で一高の制服を着ている1人の少年が一高の校舎を見上げていた。
「よく、受かったよな俺も・・・・・」
少年海道零時はそう呟き一高の中に入って行った。
「えーと、講堂は何処だ?」
「君、そこで何をしてるの?新入生みたいだけどもう入学式始まるわよ」
零時は一高に入るとこれから入学式を行う講堂を探していた。零時が講堂を探していると1人の少女が零時に声をかけた。
「あっ、えーと、講堂の場所が分からなくって探してたんです」
「講堂?講堂ならあそこの角左に曲がればあるわよ?」
「あっ、そうなんですか、ありがとうございます!!」
「それにしてRもあの子、端末に地図が入っているのに何で見てなかったのかしら?」
零時は少女に講堂の場所が分からないと伝えた。すると少女は不思議そうに零時に講堂の場所を伝えた。零時は一言少女にお礼を言うと講堂に向かって走って行った。
零時が走り去ったあと一高生徒会長七草真由美は不思議そうにそう呟いた。

「ふぅぅぅ〜〜、何とか間に合った、さてと席はあそこでいいかな」
零時はギリギリで行動に入ると一息ついた後座る席を見つけ席がある方向に向かった。
「えーと、隣いいかな?」
「あぁ、構わないが」
「ありがとう」
零時は少年に隣に座ってイイかと確認してから席に座った。
「ねえ、君名前何って言うの?」
「えっ、か・・海道零時だけど君は?」
「私は、千葉エリカ。そしてこの子は柴田美月って言うんだ」
「よ・・・よろしくお願いします」
「あぁ、よろしく」
零時が席に着くと少年隣に座っている赤髪の少女が零時に名前を聞いてきた。零時は少し驚いた表情をしたがすぐ自分の名前を名乗った。零時が名乗ると赤髪の少女千葉エリカが名前を名乗りついでに自分の隣に座っている眼鏡をかけている少女柴田美月の名前も名乗ったのだった。勝手に自己紹介された柴田は零時に一挨拶をした。
「ほら、達也君も!!」

「・・・司波達也だ、達也と呼んでくれ」
「あぁ、よろしく達也」
　エリカは自分と柴田の自己紹介が終わると少年司波達也にも自己紹介を強要した。
達也は短い間を開けた後零時に向かって自己紹介をした。
『ただ今より、国立魔法大学付属第一高校の入学を始めます』
　達也が自己紹介し終わると入学式が始まった。

『続きまして、新入生答辞、新入生代表司波深雪』
　入学式はどんどん進んでいき校長の話が終わり新入生答辞の番となった。
『この晴れの日に歓迎のお言葉を頂きまして感謝いたします。わたしは新入生を代表し第一高校の一員としての誇りを持ち「皆等しく!」勉学に励み「魔法以外でも」共に学びこの学び舎で成長することを誓います』
（うわぁぁ～、すごく際どいフレーズを言う子だな）
　新入生代表司波深雪は台がある場所に移動し答辞を読み上げた。答辞を聞いていた零時は際どいフレーズを躊躇なく言う深雪を感心していた。
『以上を持ちまして、国立魔法大学付属第一高校の入学式を終わりにします』

「あたしE組!!みんなは?」
「E組です」
「俺もE組だ」
「俺もE組だよ」
　入学式が終わり零時達は外で話しているとエリカが皆に何組かと聞いた。因みにエリカはE組だ。零時達は全員E組だと答えた。
「やった! 同じクラス! ねっ、今からホームルーム覗いていかない?」
「ごめん、今日は用事があって無理」
「そうなの、残念ね、じゃまた明日」
「あぁ、また明日」
　エリカは零時達にホームルームを見学しないかと誘った。しかし零時は用事があると言い断りかえって行ったのだった。

二話　何故Ａ組はＥ組を見下すのか

「零時おはよう!!」
「おはようございます!」
　零時は教室に入ると自分の席の前に座っている美月と美月の隣の席を借りて座っているエリカに挨拶した。エリカと美月も零時に挨拶した。
「で、昨日達也の妹の深雪と話したんだけど結構いい子でさ」
「深雪って確か新入生代表の?」
「ええ、そうです」
　エリカは零時が帰った後出会った達也の妹司波深雪の話をした。深雪という名前を聞いた零時は新入生代表の子かと質問した。零時の質問に美月がイエスと答えた。
「あっ、達也君おはよう!」
「おはようございます」
「おはよう、達也」
「あぁ、柴田さん，エリカ，零時おはよう」

零時達は深雪の話していると達也が教室に入ってきたのだった。零時達はそれぞれ達也に挨拶をし達也も3人に挨拶した。
「なぁ、達也今度お前の妹紹介してくれよ」
「何故深雪を?」
零時は達也に深雪を紹介してくれと頼んだ。達也は机にＳＤカードを挿入すの辞め零時の方向を向き少し零時を睨みながら深雪を紹介してほしい理由を聞いた。
「いや、さっきエリカからお前の妹の話を聞いて少し興味を持っただけだよ、勿論純粋にだよ」
「成程、分かった放課後になったら紹介しよう」
「あぁ、ありがとう」
零時は深雪を紹介してほしい理由を達也に言った。達也は零時の純粋にと言う言葉を聞きいつもの表情に戻し放課後に合わせると言った。
「あれっ、達也君何するの?」
達也は再び机に体を合わせるとＳＤカードを机に差し込んだ。それを見たエリカは達也に何をするのかと聞いた。
「選択科目の履修登録、さっさとやってしまおうと思って」
「キ・・・キーボードで手打ち登録」

「しかも、すごい速さ・・・」
「すごい速度だな」
　達也はエリカの質問に答えながらすさまじいスピードでキーボードを打ち履修登録を始めたのだった。達也のキーボードを打ち速さをまじかで見た零時，エリカ，美月は声に出して驚いた。
「すげー」
　達也がキーボードを打っていると横から男子生徒が顔出し言った。突然現れた男子生徒に達也は驚きキーボードを打つ手を止めた。
「ワリぃ、キーボードオンリーの入力なんて初めてでさ」
「慣れれば、こっちの方が早いんだ」
「いや、無理だろう」
　男子生徒は達也の履修登録を邪魔してしまったこと軽く謝罪しキーボードだけで登録するのは初めて見たと言った。達也は慣れればキーボードの方が早く終わると言った。零時は達也の発言にツッコミをいれた。
「おっと、自己紹介してなかったな、西城レオンハルトだ、レオって呼んでくれ、因みに得意魔法は収束系の効果魔法だ」
「司波達也だ、俺のことも達也でいい」

男子生徒レオは自分の名前と得意魔法を達也に教えた。達也もレオに自己紹介をした。

「ＯＫ達也、それで得意魔法は何よ」

「実技は苦手でな、魔工師を目指している」

「な～る、頭よさそうだもんなお前」

レオは達也に得意魔法は何かと聞いた。達也は魔法は得意ではないため魔工師を目指していると言った。レオは達也の言葉にすぐ納得した。

「へぇ～、達也って魔工師希望なんだ」

「ん？達也こいつ誰？」

「あっ、自己紹介がまだだったね、俺は海道零時、零時って呼んでくれ、因みに得意魔法は加速魔法だ」

「おう、よろしくな零時」

「あぁ、よろしく」

達也が魔工師志望ということに零時が少し驚いているとレオが達也に零時の事を聞いた。零時はレオに自己紹介をした。

「へっ、司波君って魔工師志望なの!!」

「達也、零時、こいつ誰？」

今度はエリカが達也の魔工師志望のことに驚くとレオが達也と零時にエリカのことを聞いた。
「うわぁっ、いきなりコイツ呼ばわり失礼な奴、モテない男はこれだから」
「なあっ、失礼な奴はてめぇだろうがよ！少しくらい面がいいからって調子こいてんじゃねぇぞ！」
「あら、ルックスは大事なのよ」
エリカは零時とは違いコイツ呼ばわりが気に食わなかったのかレオに皮肉交じりな事を言った。レオはモテない男言う単語を聞きエリカと言い争いを始めた。
「エリカちゃん、やめなよ・・・」
「だらしなさとワイルドを取り違えてるむさ男とには分からないかもしれないけど」
「なっ、なっ、なにぃぃ‼」
エリカは美月の言葉を無視して更にレオに皮肉をぶつけた。レオはエリカに近づき今にも殴り掛かりそうだった。
そんな時タイミングよく予冷のチャイムが鳴ったのだった。
「レオ、もうやめとけ、予冷だ」
「そうだぜ、レオ席に戻ろう」
「エリカちゃんも少し言いすぎよ」

「けっ‼」
「ふんっ‼」
予冷が鳴ると今まで履修登録をしていた達也とそれを見ていた零時がレオを止めた。美月はエリカに軽く注意をした。２人は互いににらみ合ったあとそれぞれの席へと戻った。

「あれぇ?」
「何で先生が?」
(確かに、個別指導があるのは1科生だなのにな・・・)
チャイムが鳴り終わると同時にセーターの上に白衣を纏った女教師が入ってきた。女教師が入ってくると教室中がざわめいた。何故教室中がざわめいたのかそれは個別指導があるのは1科生だけなのだ。
「皆さん、入学おめでとう。この学校の総合カウンセラー小野遥です」
女教師小野遥は教壇の前に立つと自己紹介をした。
「皆さんの相談相手となり専門的なカウンセリングが必要な場合はそれを紹介する役目です。プライバシーの保護も万全です。皆さんが充実した学生生活を送れるよう全力

でサポートしていくのでよろしくお願いします」
「さて、これから本校のカリキュラムに関するガイダンスの後選択科目の履修登録を行います」
　小野先生はカウンセリングの事を説明した後一高のカリキュラムのガイダンスを始めた。

「達也，零時！工房見学に行かないか⁉」
「俺はいいぞ～、達也は？」
「俺も大丈夫だ、それより闘技場じゃなくていいのか？」
　ガイダンスが終わるとレオが達也と達也の席にいる零時に工房見学に誘った。零時と達也は工房見学の誘いをＯＫ
　した。達也はＯＫした後レオに見学するのは闘技場ではなくて大丈夫なのかと聞いた。
「まぁ、そっちも好きだけどよ、硬化魔法って武器との相性がいいだろう？だから、武器の調整スキルも身に着けたいんだよ」
「工房でしたら私も」

「じゃあ、みんなで行くか！」
レオは工房を見学したい理由を達也に話した。レオ達の話を聞いていた美月も工房を見学したいと言った。するとレオはみんなで見学することを提案した。
「あたしも行く！」
「オメーはどう見ても、闘技場だろうが‼」
「野生動物に言われたくないわよ」
エリカも工房見学に行くと言うとまたレオと口喧嘩を始めたのだった。
「さっ、さっさと行きましょう！時間がもったいないですよ‼」
「レオもバカやってないで行こうぜ」
美月は後ろからエリカを抑えると零時はレオの肩に手を置きレオを抑えた。２人の口喧嘩が収まると５人は工房に向かった。

「工房見学楽しかったですね」
「なかなか、有意義だったな」
「あぁ、結構タメになったしな」
工房見学が終わり５人は食堂で昼食を取りながら工房見学の感想を言い合っていた。

「あんな、細かい作業俺にできるかな・・・」
「アンタには無理よ、決まってんでしょ」
「何をっ‼」
　レオが神経に作業ができるか考えているとエリカがまたレオにちょっかいを出し再び口喧嘩が始まろうしていた。
「お兄様！」
「深雪・・・」
「えっ、あれがお前の妹か美人だな」
「深雪はやらないぞ」
「いや、とらないから」
　レオとエリカの口喧嘩が始まるその時１人の女子生徒が達也をお兄様と言いながら達也の元に走ってきた。女子生徒見た零時は美人だなと素直な感想を述べた。それに対して達也は零時を睨みながら妹はやらないと言った。零時は冷や汗を流しながらとらないと言った。
「お兄様、私も今から昼食なんです、ごっ一緒してもよろしいでしょうか？あらっ、の方は？」
「あぁ、こいつはクラスメイトの零時だ」

「どうも、海道零時です、よろしく」
「司波深雪です、よろしくお願いします」
女子生徒深雪は達也と昼食を一緒に取ってイイかと聞いた後零時を見て達也に零時の事を聞いた。達也が短く零時のこと紹介した後零時自身が深雪に自己紹介した。深雪もそれに対して零時に自己紹介した。
「ほら、深雪ここ空いてるよ」
「ありがとうエリカ」
「司波さん、もっと広いところに行こうよ」
エリカは席を詰め隣を空け深雪に座るように言った。深雪はエリカにお礼を言い席に座ろうとしたとき1人の1科生が深雪に話しかけてきた。
「いえ、私はこちらで」
「えっ、司波さんウィードと相席なんって辞めるべきだ」
「はぁ?」
深雪は男子生徒の誘いをやんわりと断ると男子生徒はエリカの紋章を見ながらウィードと相席するには辞めた方がいいと言った。男子生徒の発言にエリカは機嫌を悪くした。
「1科と2科のけじめはつけた方がいいよ」

「なんだと」
「深雪俺は済ませたから先に行くよ」
「おい、待てよ達也」
「達也君！」
　今度は違う1科生2科生を見下す発言をするとレオが立ち上がり1科生に詰め寄った。喧嘩が始まると思ったのか達也はトレイを持ち席を離れてしまったすると達也を追うようにエリカ，レオ，美月が席を離れた。
「・・・・別に、深雪が悪いわけじゃないよ、あと1科生の君達そんなに偉そうにしてると足元をすくわれすよ」
「なっ、どうゆう意味だ！」
「言葉通りの意味だよ」
「なあっ、その言葉撤回しろ！おい！」
　零時は表情が暗くなっている深雪をフォローした後自分達を見下した1科生に向かって挑発的なこと言った。零時は1科生の言葉を無視して達也達の元に向かった。

三話　何故Ａ組とＥ組は言い争いをするのか

『下校時間です。所用のない生徒は速やかに下校してください』
　下校のチャイムが鳴り響いていた。
「いい加減に、諦めたらどうなんですか‼」
「僕たちは彼女に相談することがあるんだ」
「そうよ、少し時間を貸して貰うだけなんだから」
　現在校門前では食堂でＥ組を見下したＡ組生徒達とレオ達が言い争いをしていた。だが、言い争いに参加しているのはエリカ，レオ，そして以外にも美月だったのだ。
「おい、達也あれ止めなくっていいのか？」
「そうですよ、お兄様」
　言い争いに参加していない零時と深雪は達也に言い争いを止めなくっていいのかと聞いた。
「今の所は大丈夫だろう、何かあったら零時お前が止めてくれ」
「俺かよ・・・まぁ、いいけど」
　達也は言い争いを見て今の所は問題ないと判断した。そしてもし何か会ったら零時

に止めくれと頼んだ。
「とにかく、深雪さんはお兄さんと一緒に帰るって言っているんです！何の権利があって２人の仲を引き裂こうと言うんですか‼」
　達也たちがそんなことを話している中美月たちの言い争いはヒートアップしていた。
「み・・・美月たら、一体何を・・・何を勘違いしているの」
「深雪、何故お前が焦る？」
「へっ‼いえ、焦ってなどおりませんよ？」
「そして、何故疑問形？」
「何でこんな時に、兄弟で漫才してるんだよ・・・」
　言い争いがヒートアップしている中深雪と達也が呑気に漫才していた。零時は２人の漫才を見てボソリとツッコミを入れていた。
「これは、１―Ａの問題だ！ウィードとごときが僕達ブルームに口出しするな‼」
「あぁん？」
　１科生の男子生徒はわざわざ禁止用語を使い自分の意見を口にした。男子生徒の発言を聞いたレオとエリカは男子生徒を睨んだ。
「同じ新入生じゃないですか、あなた達ブルームが今の時点で。一体どれだけ優れてると言うんですか‼」

「くっ！」
　レオとエリカが1科生を睨んでいると美月が1科生に言った。美月の言葉に1科生達は顔をしかめた。
「まずいな・・・」
「えっ、まずい？じゃ止めた方がいいのか？」
「あぁ、だが俺が指示を出すまで動くなよ」
「あぁ・・・分かった」
　1科生の表情を見た達也は呟いた。達也の呟きを聞いた零時は止めた方がいいのかと達也に聞いた。達也は自分が指示を出すまで動くなと零時に言った。
「ふっ、どれだけ優れているか知りたいか？」
「ふっ、面白れぇ、是非とも教えてもらおうじゃねぇか」
　1科生の男子生徒森崎駿はそう言った。森崎の発言にレオが答えた。
「いいだろう、だったら教えてやる、これが1科と2科の差だ‼」
「うぉおおおお‼」
「お兄様‼」
「大丈夫だ、深雪」
　森崎はレオの答えを聞くと腰着けているホルダーから銃型のＣＡＤを取り出しレオ

をロックオンした。レオはロックオンされたのにも関わらず森崎に特攻して行った。それを見た深雪は達也に声をかけた。だか達也は冷静に大丈夫だと答えた。

「ぐぁぁ‼」

「れ・・零時」

「全く、こんな所で堂々とＣＡＤを使うなよ」

　レオが森崎の元に到着する前に森崎は何者かによって地面に倒され拘束されていたからだ。その何者かとは今まで達也の隣にいた零時だったのだ。この零時の行動にはレオ達や1科生達も驚いていた。

「クッソ!ウィードめ森崎を離せ‼」

「みんなダメ!」

　他の1科生の男子生徒が森崎拘束している零時に向かってＣＡＤを構えた。それを見た女子生徒二人組の1人が男子生徒達を止めるためにＣＡＤを使った。

「えっ、ちょ、やばくね俺・・・」

「お兄様、海道君が!」

「大丈夫だ」

　零時は全員が自分を狙っていることに気づくとさっきまでの冷静さは何処に行ったのか森崎を押さえつけながら焦りだした。それを見た深雪はまた達也に声をかけるが

達也の返事は一緒のものだった。
「きゃ‼」
「止めなさい、自衛目的以外の魔法による対人攻撃は犯罪行為ですよ！」
「風紀委員長の渡辺摩利だ！事情を聞きます、全員ついてきなさい」
　達也が言った直後女子生徒の魔法が打ち消されたのだった。そしてＣＡＤを操作しながら真由美がやってきたそして真由美の横には風紀委員委員長の渡辺摩利がやってきた。２人の登場により場の空気が変わった。
「すみません、悪ふざけがすぎました」
「悪ふざけ？」
「はい、森崎一門のクイックドローは有名ですから、後学のために見せてもらうだけのつもりだったんですが、あまりにもしんに迫っていたもので思わず手がでてしまいました」
　その場にいた全員が連行されると思っていた中達也が摩利に近づき言い訳を言い始めた。
「では、そこの女子が攻撃性の魔法を発動しようとしていたのはどうしてだ？」
「あれは、ただの閃光魔法です、威力もかなり抑えられていました」
「そうか、では何故彼は森崎を拘束していたのだ？」

「あれは、自分達が攻撃されていると勘違いして助けてくれた友人ですよ」
　摩利は女子生徒を見て何故攻撃性の魔法を発動させようとしていたのかと聞いた。達也はそれに威力が抑えられた閃光魔法だと答えた。すると今度はさっきまで森崎を拘束していた零時を見て何故森崎を拘束していたのか地聞いた。達也はそれに勘違いした友人が助けてくれと答えた。
「君は、分析も誤魔化すのも得意なようだ」
「誤魔化すなんてとんでもない自分はただの２科生です」
　摩利は達也に言った。すると達也は肩の紋章を見せながら自分はただの２科生だと答えた。
「ちょっとした、行き違いだったんです、お手を煩わせてしまい申し訳ありませんでした」
「俺も勘違いして紛らわしい行動をとってしまいすいませんでした」
　摩利と達也が目を合わせ合っていると深雪と零時が前に出で頭を下げ謝罪した。
「もういいじゃない摩利、達也君本当にただの見学だったのよね？生徒同士で教え合う事が禁止されている訳じゃありませんが、魔法の講師には細かな制限があります、魔法の発動に伴う自習活動は控えた方がいいですね、そうしないとその子見たく勘違いしてします子が出てきてしますしね」

「んっ！会長がこう仰られていることであるし、今回は不問にします、以後このようなことが無いように」

摩利は零時と深雪の謝罪にたじろいでしまった。それを見た真由美が場をまとめた。

摩利は一度咳払いをしたあと今回の事は不問にすると言った。

「君と勘違いして森崎を抑えつけていた君の名前は？」

「1年E組司波達也です」

「1年E組海道零時です」

「覚えておこう」

摩利は帰り際達也と零時に名前を聞いた。２人は所属クラスを含めて名前を名乗った。こうして1年E組と1年A組の言い争いは無事に終結したのだった。

四話　何故重加速は突然起きたのか

「じゃ、深雪さんのＣＡＤを調整しているのは達也さん何ですか?」
「ええ、お兄様にお任せするのが一番安心ですから」
「少し、アレンジしてるだけだよ」
　校門での騒動が終わり零時達は閃光魔法を放とうとした光井ほのかその友達北山雫と下校していた。何故零時達がほのか達と帰ることになったのかそれは数十分前に遡る。

　～数十分前～
「僕は森崎駿、お前が見抜いた通り森崎家に連なる者だ、司波達也僕はお前を認めない!」
「やれやれ」
「お兄様、もう帰りませんか?」
「そうだな、じゃみんなで・・・」

騒動が終わると森崎は達也を指差してお前は認めないと言い他の1科生を連れ帰って行った。森崎が帰ると達也は深雪に言われ零時達に声をかけるため後ろを振り返ると閃光魔法を放った女子生徒が立ちふさがっていたのだ。
「何?まだやる気?」
「折角、丸く収まったのに」
「み・・光井ほのかです、さっきはすいませんでした」
「・・・・・・は?」
立ちふさがった女子生徒に対してエリカと零時は言った。だが女子生徒は名前を達也に名乗った後達也に向かって頭を下げたのだった。いきなり謝罪された達也は驚いた。
「北山雫です、ほのかを庇ってくれてありがとうがざいました、大事に至らなかったのはお兄さんのお陰です」
「これでも同じ1年生なんだ、お兄さんはやめてくれ、達也でいいから」
「わかりました」
ほのかが達也に頭を下げているとほのかの友人北山雫がほのかを庇ったお礼を言った。達也は同学年だからお兄さん呼びはやめてくれと言った。
「・・・・・・・」

「「・・・・・・・」」
「あの、光井さんまだ何か？」
「あ、あのっ、えと、その、駅までご一緒してもいいですか？」
「「「「えっ・・・・」」」」」
　達也とほのかと雫が黙って見つめ合ってると深雪がほのかに聞いた。ほのかは顔を上げ駅まで一緒に帰っていいかとお願いした。ほのかのお願いに全員が目を丸くした。

～帰り道～

　という理由があり零時達はほのかと雫と一緒に下校をしていたのだ。
「ねぇ、達也君あたしのも見てもらえない？」
「無理、あんた特殊な形状のＣＡＤをいじる自信はないよ」
　エリカは達也がＣＡＤを調整できることしると騒動の時にも密かに出していた警棒型のＣＡＤの調整をお願いした。
　そのお願いに達也は特殊なＣＡＤをいじる自信はないと言った。
「やっぱり、達也君は凄いね～」
「何がだ？」
「これが、ＣＡＤって分かる所が、まぁ、それはいいとしてずっと気になってたんだけど

零時君はどうやってあそこまで移動したの？」

エリカは達也の答えを聞くと何故か達也を褒めた。達也は何がすごいのか聞いた。エリカは自身の警棒型ＣＡＤをすぐＣＡＤと見抜いたところが凄いと言った。エリカは自身のＣＡＤをしまい零時に質問した。質問の内容はどうやって森崎のところまで瞬時に移動したのかだった。

「確かに、あれどうやったんだ？」

「私も気になります」

「私も・・・・」

「私もです」

零時の移動方法にレオ，ほのか，雫，美月も興味を示した。

（あ～、あれね、あれは・・・・）

（な・・・何だこれ急に体が・・・）

（体がゆっくりしか動かない）

零時が移動方法を説明しようとした時零時は急に説明するのを辞めたのだった、いや説明が出来なくなったのだった。何故なら零時を含めた全員の体がゆっくりとしか動かなくなったのだから。

「まさか、これが重加速か？」

「あぁ、正解だ」
　唯一重加速の中で辛うじて喋れる達也が言った通りこれは2年前のグローバルフリーズを境に頻繁起こる重加速だったのだ。達也の疑問に達也達の前から重加速をもろともせずフードを被った1人の青年が現れた。
「海道零時は、何処だ?.まぁいい全員殺せばすむ話だ」
　青年はそう言うと突如2年前に現れた怪物ロイミュードとなり達也達にゆっくりと近づいて行ったのだ。突如ロイミュードに姿を変えた青年を見て誰もが恐怖した何故なら怪物が目の前にいるのに重加速のせいで逃げられないからだ。
「お前が、海道零時だな」
　ロイミュードはそう言い零の前に立った。勿論零は零時ではないだが重加速のせいで上手く言葉を喋れないのだ。
（誰か・・・誰か、助けて‼）
「おりゃぁぁ‼」
（えっ?）
　零は目をつぶり助けを求めたすると誰かの声が聞こえると同時にロイミュードのうめき声も聞こえたのだった。零を含めた全員が驚いた何故ならロイミュードを殴り飛ばしたのは今まで一緒に動けないでいた零時だったから。

「何だお前は、何故重加速の中で何故動ける!!」
「何だお前って?俺がお前が探してる海道零時だけど」
怪物の質問答えた零時の肩には1台のミニーカーが乗っていた。

五話　何故海道零時は変身するのか

「成程、お前が海道零時、仮面ライダードライブか・・・・」
(((((仮面ライダードライブ？)))))
(成程、零時が２年前に現れた戦士だったのか・・・)
　ロイミュードは零時の名前を聞くと仮面ライダードライブと言う単語を口にした。ドライブという単語を聞いた深雪達はゆっくりと首を傾げた。だが達也だけはドライブという単語を知っている様子だった。
「で、何でお前は俺を探してたんだ？」
「そんなの決まってるだろう、２年前グローバルフリーズの時にお前に葬られた仲間達の仇だ！」
　零時はロイミュードに何故自分を探しているのかと聞いた。ロイミュードは２年前の事件グローバルフリーズで零時に葬られた仲間達の仇だと言った。だがロイミュードの言葉には１つ疑問が存在する。その疑問とは何故零時が２年前グローバルフリーズでドライブにより葬られた仲間達の仇なのか。
「成程、お前は２年前の生き残りか・・・じゃ今ここでお前を倒させてもらうよ」

零時はそう言い何処から取り出したのか青色のベルトマッハドライバーを腰に巻き車のようなキートライドロンキーを取り出した。
「変身!」
『シグナルバイク!シフトカー!ライダー!超デットヒート!』
零時はそう言いマッハドライバーにトライドロンキーを差し込みマッハドライバーのレバーを倒した。するとマッハドライバーから機械音が流れ零時は2年前のグローバルフリーズに現れた戦士仮面ライダードライブに変身したのだった。そうこれで何故零時が2年前のグローバルフリーズで倒されたロイミュード達の仇なのかそう零時が仮面ライダードライブだったからだ。
「ドライブ!仲間達の仇だ!」
「おっと、おい皆取り敢えず何処かに隠れていてくれ」
ロイミュードはそう叫びながら手から長い爪を生やし零時に襲い掛かったのだった。零時はそれを両腕で受け止め後ろに居る達也達に向かって何処かに隠れるように指示を出した。達也達は頷き重加速の中何とか歩き近くの路地裏に身を潜めた。
「ふぅ〜、取り敢えず皆隠れられたかな?」
「ドライブ、他人の事ばかり心配してると痛い目に合うぞ!」
「いや、痛い目に合うのはお前だろうが!」

「グァ!!」
　零時はロイミュードの攻撃を抑えながら達也達が無事に隠れられた事を確認しているとロイミュードはそれを見ると痛い目に合うと言いながら更に力を籠め零時のガード―を壊そうとした。だが零時はロイミュードの言葉をそのまま返すと右腕でロイミュードの顔を殴ったのだった。ロイミュードは短い悲鳴を上げ数メートル吹っ飛んだのだった。
「クッソ!!舐めるな!!」
「お前には、悪いがとっとと終わらせてもらう」
『超デットヒート!!』
　ロイミュードは吹っ飛ばされるとそう言いすぐに立ち上がり零時に向かって走り出したのだった。零時はそう言うとマッハドライバーの上部にあるボタン型スイッチブーストイグナイターを連打し体から煙を放出し限界稼働状態となった。
「はぁぁぁぁ!!おりゃぁぁぁ!!」
「ぐわぁぁぁぁ!!」
　限界稼働状態となった零時はとてつもない速さでロイミュードの腹部に連続のパンチを繰り出したのだった。ロイミュードは再び後方数メートルまで吹っ飛んだのだった。

「うっ・・・うぅぅぅ」
「さぁ、これで終わりだ‼」
『必殺!フルスロットル!超デットヒート』
「はぁぁぁ、おりゃぁぁぁ‼」
「な・・・ぐっ・・・ぐっわぁぁぁ‼」
　ロイミュードは何とかヨロヨロと立ち上がった。零時はロイミュードに向かってそう言いレバーを上げ手に向かって高く跳躍左足を突き出しロイミュードにライダーキックを食らわさせたのだ。ライダーキックを食らったロイミュードは断末魔を上げその場で爆発し空中にロイミュードのコアが現れすぐ爆発したのだった。
「ふぅ～、何とか倒せたな」
『オツカ～レ』
　零時はロイミュードのコアが爆発したのを確認するとレバーを上げトライドロンキーを抜き変身を解除した。

六話　何故海道零時は自分の事を司波達也達に説明するのか

「おい、皆もう出てきても大丈夫だぞ～」
　零時は変身を解除すると路地裏に隠れている達也達に声をかけた。零時の声を聞くと達也達はぞろぞろと路地裏から出てきた。
「お・・おい、零時お前一体何者なんだ？」
「そうよ！いきなり重加速が来たと思ったら今度は怪物が現れてそしたらアンタがいきなり変身するしもうわけ分からないわよ‼」
「そうですよ、説明してください！」
「わ・・・分かったよ、説明するから取り敢えず離れてくれ」
　路地裏から出てきたレオ，エリカ，美月は零時に詰め寄り何故零時が仮面ライダードライブに変身したのかを聞いた。零時は３人から少し距離を取り３人の質問に答えると言った。
「話すと長くなるから、そこのレストランで話そうか、達也達はどうする？」
　零時は近くにあるレストランを指差しそこで話すことを提案し自分に質問してこな

かった達也，深雪，ほのか，雫に聞いた。
「私も気になるので私も行きます」
「ほのかが、行くなら私も行く・・・」
「折角だから、俺も零時の話を聞こう、深雪はどうする?」
「お兄様が残るなら私も残ります」
「ＯＫ、じゃ全員参加で決まりだな」
４人は零時の話を聞きたいと言った。零時達は零時を先頭にレストランに入って行った。

＊

「いらっしませ! 何名様でいらっしゃいますか?」
「８名です」
「かしこまりました、席にご案内致します。こちらへどうぞ」
レストランに入った零時達は店員に席まで案内してもらった。
「こちらがメニューでございます」
零時達を案内した店員は零時達にメニューを渡した。

「さてと、説明する前に何か頼まないとな、皆は何にする？」
零時は自分の事を説明する前にメニューを注文しようと言った。

＊

「お待たせいたしました、アイスコーヒーが８つです」
「ありがとうございます」
「ごゆっくりどうぞ、失礼します」
店員は零時達が頼んだアイスコーヒー８つを持ってきた。店員はアイスコーヒーを８人の前に置くと会釈して下がった。
「じゃ、頼んだアイスコーヒーが来たことだし、皆質問してもいいよ」
「分った、じゃ最初は俺からだ、零時が変身したライダーは何なんだ？」
「俺が変身したライダーは仮面ライダードライブだ」
レオは零時に何の仮面ライダーに変身したのかと聞いた。零時は変身したライダーは仮面ライダードライブだと答えた。
「次は私ね、あの怪人ロイミュードっていったい何者なの？」
「ロイミュードは２年前グローバルフリーズで重加速を使い破壊活動を行った怪人軍団

だ、さっき倒した奴は2年前のグローバルフリーズの生き残りだ」
　エリカはロイミュードとは何者かと聞いた。零時は2年前グローバルフリーズで破壊活動を行った怪人軍団だと答えた。
「他に、何か聞きたいことがある人はいる?」
「・・・零時2年前グローバルフリーズでロイミュード達と戦ったライダーはお前か?」
「あぁ、俺だ」
「そうか、ありがとう」
　零時は他に質問がある人はいるかと聞いた。すると達也が手を上げ2年前のグローバルフリーズで戦ったライダーはお前かと聞いた。零時はそうだと答え達也は何故か一言お礼を言った。
「他に、質問がないならそろそろ出よう、あと俺がドライブだ言うことは秘密な」
　零時は自分がドライブだと言うことは秘密にしてくれと達也達に言いレストランを後にした